

1995年度の教育実践研究指導センター研究プロジェクトの活動について

当センターは開所して三年目に入るが、センターの活動の柱の一つである「教育に関する実践的研究」もようやく軌道にのりだした。

四つの分野の共同研究はそれぞれテーマを異にするものの、いずれも教育に関する現代的な課題を追究している。また、これらの共同研究は大学の教員と附属学校、並びに県下の小・中・高校の教員によって進められており、何よりも学校現場での教育実践の事実を大切に研究を進めているのが特徴である。

以下、各プロジェクトの研究経過を簡単に紹介する。

I 教師教育と実習改革プロジェクト

本年度は4回の共同研究を行った。その内容は大きく二点である。

第一は本学の教育実習改革に関する基礎的研究である。とりわけ事前・事後指導の内容と方法に関して、室井、松浦からの報告をもとに研究をすすめた。その結果は、事前指導の時期、並びに内容について、教育実習委員会への提言としてまとめた。また松浦は教育実習前後の学生の意識調査結果を、角田は附属中学校と大学とを結ぶネットワークを活用した実習指導の改革案を本紀要にまとめた。

第二は、教師教育に関する総合的研究である。これに関しては、赤阪が県内小学校での新任教員の特徴、並びに彼らの成長に関する報告をおこなった。

今後は、大学における教員養成と学校現場の教師の成長とをつなぐ教師教育の在り方について、実践的研究を進めようとしている。

II 情報教育研究プロジェクト

95年度には8回の研究会を開催し、各研究員がこれまでに実践してきた内容について報告を行った。

各報告は、それぞれの興味関心、あるいは専門性を生かしたものであり、小学校でのマルチメディアの活用、中学校でのプレゼンテーションツールとしての活用、自作教材ソフト（コースウェア）の開発、障害児のコンピュータ利用等、幅広く相互に学び合う良い機会となった。

この他、夏休みにはメディアキッズで活躍中の中川一史氏を招き講演会を開催し、12月には、附属小学校の研究発表会に参加するなど、多様な研究会活動を行った。

今後は、テーマを設定し共同研究を進めると同時に、インターネットやマルチメディアに関する新しい技術の活用に関して学ぶ機会を設けていくことになった。

III 「教科教育と授業改革」プロジェクト

1995年度の本プロジェクトは4回の研究会を行った。

第1回研究会 7月25日（火）5時30分～7時30分

内容

「学びのための授業論」(グループ・ディダクティカ編 勁草書房)から、第9章「教育内容の根拠づけとして目的論を問うこと」を素材として、特別研究員でもある大学院生の山田さんと古川さんにレポートをお願いし、それをめぐって討論をおこなった。

第2回研究会10月24日(火) 5時30分～7時30分

内容

市川研究員が「学習観の転換をめぐる論議」について報告し、それをめぐって討論をおこなった。(発表内容は、センター紀要参照)

第3回研究会 11月28日(火) 5時30分～7時30分

内容

早田研究員の「学習媒体の親近性尺度作成に関する一考察」と、赤坂特別研究員の「授業改革についての基本的な考え方」の二つの研究報告があり、それをめぐっての討論がなされた。

第4回研究会 1996年2月27日(火) 5時30分～7時30分

内容

プロジェクトの本年度のまとめとして、「子どもを大切にした授業」とは何かをめぐって、各自の意見を発表し合い、自由討論を行った。

Ⅳ 子どもの認知と学習指導に関する研究プロジェクト

全体研究会を1995年6月から1996年5月現在、6回開催し、「『できる』と『わかる』」をテーマに、各研究員、特別研究員が興味、関心を持っていること報告、発表し、それをもとに活発な議論が展開されている。各回の発表の概要は次のとおりである。

第2回(米澤好史研究員)学習者間の「やりとり」や学習者と教材との「かかわり」の大切さを指摘し、「立ち止まり」「気づく」営みとしての知的教育の必要性を指摘した。

第3回(松尾特別研究員)木材加工に関して、繊維方向と割れやすさの知識が実際の板の鋸引きにいかされないこと等を指摘した。「現実場面の意識」の重要性が示唆された。(森特別研究員)習熟の意味を訓練と対比し、教師の指導や算数の簡便法のいくつかを紹介した。「わかった」ことが「できる」につながるための「相対化」の意義が示唆された。

第4回(中野・西本・川口・神谷研究員)養護学校高等部生徒の料理手順の獲得過程を実習前後の手順書きの変移から分析した。知的障害児の手続き行為の認知単位等を考察した。また、算数教育を例に、「できる中でわかる」「できていてもわからない」を議論した。

第5回(藤田特別研究員)宮大工棟梁の西岡常一氏の教育観を紹介し、見本を呈示し、失敗を自覚させ、自己関与、学習者の学習過程での位置づけの自覚の大切さが議論された。更に「生活知」の大切さ、こどもの現実感と教師のこだわりが議論された。

第6回(秋月特別研究員)「教室に水族館を作ろう」等の教育実践から、創造力や個性を画一的に押しつけるのではなく、現実を見つめた上でそれを乗り越える大切さを指摘した。「子どもが作り出す文化活動条件づくり」の提言から視点意識の重要性を議論した。